

---

# 砲丸少女と錬鉄の英雄

きんぎょ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

砲丸少女と錬鉄の英雄

### 【Nコード】

N0080J

### 【作者名】

きんぎょ

### 【あらすじ】

f a t e /となのはの無印クロスで、再構築モノです。なのは無印の設定をかなりいじっています。それでも良ければ、一読していただけると幸いです。

## 第一話

なのはは、幼いながらに整った顔を悲しげに歪ませ、髪が首筋で跳ねるのを気にせずに走っていた。その額には汗が薄くにじみ、前髪が張り付いている。

走ることで負荷をかけてしまうのが心苦しいが、血相を変えてまで頼まれたのだ。ならば、少しでも早く走ってこの問題を解決するのが正解だろう。

それでも口を開いてしまうのは、この少女の優しさだった。

「ごめんね、フェレットさん。揺れ、辛い？」

「ううん。僕こそごめん。巻き込んでしまって、それに」

「いいのいいの！ 私は気にしてないから。それじゃペース上げるね！」

そういつてなのはは、地面を蹴る足に力を込める。

いくら強大な魔力があろうとも、いくら精神が早熟していたとしても、肉体のほうは小学三年生のそれ。

空を切る手が、前へと進む足が、だんだんと力を失っていくのはしょうがないことだった。しかし、それでもなのはは前へ前へと足を出し続けた。

（シロウ、さん……！）

ただ、脳内に、その人を浮かべながら。

ことり。茶色いマグと、底の深い皿がテーブルに置かれる音が響く。

「ホットミルクだ、落ち着くだろう」

テーブルの上には、優しく置かれた喋るフェレット。そして、テーブルの横に、フェレットが会いたかった人物 エミヤシロウが

居た。

シロウは、テーブルに着くと自身の前にもマグを置いた。その動作を、なのははコップから立ち込める薄い湯気越しに見詰めていた。

時刻は、それこそ明かりが無いと、手前すら確認出来ない程夜が街を包み込んでいる。

灰を被ったような真白の髪を持つ青年は、チャイムの音に呼ばれて玄関先へと出た。付け加えると彼は調べ物をしていて最中であったこと、そして人が近付いて来たことすら察することが出来ない程に弱体化した自分に、おくびにも出さないが少々不機嫌だった。

そこにいたのはたして、高町なのはだった。息は切れ切れでとても荒く、全力疾走してきたと推測出来るのを裏付けるように赤い頬。そしてその端正な顔には汗が浮かんでいた。

手には怪我をしたフェレット。

それは、魔法関連の知り合いであるユーノ・スクライアだった。しかも、一般人であり、友達の娘である高町なのはが彼を連れて来たのだ。それは感情をあまり表に出さないシロウが、絶句をするくらい奇異な出来事であった。

シロウが、詳しく話を聞かないと思わせるには十分すぎるくらい重大な出来事だった。

「それで、どうしたのだ」

「どうしたじゃないですよ！ シロウさんは今まで何してたんですか。あれから凄く心配したんですよ。生きてたなら、せめて一言でいいから連絡が欲しかったですよ！」

ユーノは、シロウへとその怒気をぶつけていた。

なのはは、フェレットの姿だからか、怒りよりも可愛さを先に感じる。

しかし、これでは話が進まない。自身が体験した不思議な出来事に、どうやらシロウも関係しているらしいし、その説明も、また、聞きたいところである。

そう考え、なのはは口を開いた。

「フェレットさん、少し落ち着いて欲しいな。」

私は、学校から帰ってる途中に何かに呼ばれたような気がして、行ってみたら」

「ユーノが居た、という訳か。……久し振りだな、ユーノ。それについては申し訳ない。後でゆっくり説明させてもらおう」

いつも浮かべている不遜な笑みを消し、本当にすまなそうな表情を浮かべるシロウを見ながら、なのはの脳内を疑問が埋め尽くしていた。

「……この件はジュエルシード絡み、か？」

「そうです、シロウさん。彼女も……なのはさんも捲き込んでしまいました」

そうして、ユーノは話を始めた。

一人の少女がユーノの念話を受け取ったことで始まる、出会いの話を。

話を聞き終わったシロウは、ため息を吐いた。目を閉じていて、何を考えているかは分からない。

話事態は至極単純なモノだ。なのはが、ユーノの念話を受け取り、ユーノに会いに行くとジュエルシードが暴走していた。そこで、レイジングハートを使用してジュエルシードを封印した。ユーノの怪我に関して、「シロウさんなら……」となのはが溢した言葉に、ユーノが大層驚いてシロウに会いたいと言ってきたのだ。

そして、今に至る。眉間にシワがよりはじめたシロウに、なのは何か不味いことをしてしまったのかと不安に思う。

シロウは、どんな状況であれ魔法に関わるのをよしとしない。魔法とは、即ち異端である。一般に生きていたら関わりたくないものなのだから。

ユーノの世界のようにおおつぴらに魔法の存在が広まり、認知されているならば話は別だが、今の地球はそうではない。

出来るならば今からでも魔法に関しての関わりを断って欲しかった。

だが。

「ところでなのは。君は時間は大丈夫なのか？」

「にやっ！ 忘れてた！ どうしよう……」

なのはは、頭を抱えてうずくまる。もし、こんな遅くに歩いたのがバレたら、家族に何て怒られるか分かったものではない。

「送っていこう。……詳しい話はまた明日で良いか？」

良いも何も、これ以上話し込んだら刻々と状況は悪くなっていく。怒られるにしても、軽い方が良い。

シロウの言葉になのはは頷くと、立ち上がった。

さすがに夜はすこし寒い。

体全体を底冷えさせる夜気に、今までしていた思考を遮られる。

ユーノは、フェレットの可愛い姿に相応しくないため息を吐いた。

……動物の体は毛が生えてはいるが、人間の服のそれと大差ない。寒いものは寒いのだ。

「あー、明日の宿題忘れてた！」

「なのはは頭がいいからな。これからやればすぐ終わるんじゃないか？」

二人の会話に参加せず今まで起こったことを整理してたユーノだが、くつくつと喉の奥で笑い声をあげ、とても砕けた口調で喋るシロウを見て声を出して驚きそうになった。

ユーノはエミヤシロウ　アーチャーという青年を、冷淡で、他人と仲良くするのを良しとしない、どこか醒めた人だと思っていたのだ。

しかし、なのはと喋るシロウを見てその考えを改める。

と、シロウがユーノに話かけた。

「ユーノ。君は今晚どうするのだ」

「あ、シロウさんって明日もあの家に居ますよね。でしたら、僕は今晚なのはと一緒に居たいです。」

詳しい話は、明日の日中にでも聞きに行きます」

少し考え、ユーノはこう答えた。

「それは好都合だ。ユーノ、なのはをうまくフォローしてやってくれ」

え？　とユーノが疑問を返す暇も無かった。

一瞬で、ユーノの見慣れた顔　アーチャーの冷たいそれになった。

そして、なのはに言った。

「なのは。私は君が魔法に関わるのは反対だ。

魔法は異端だ。関わるだけで君だけじゃなく、家族に被害が加わる可能性だってある。

……この件は私の監督不届きだ。

私とユーノとでちゃんとケリをつけることを約束しよう。

だから、君は関わってはいけない」

……この発言自体は、ユーノのイメージするアーチャーという青年と反していなかった。

ただ、小声でどこか囁くように言ったそれにすこし疑問を感じた。

アーチャーに接してたから分かる、ささやかな違和感。

しかし、それを追及しなかった。シヨックをうけた表情を浮かべるなのはを慰めるのに意識を割いてしまったからだ。

そして、それを後で後悔することになる。

「なのは、シロウさんも言った通り、後は僕たちでやるよ」  
所変わって、今はなのはの部屋だ。

あの後高町家につくと、シロウは家に寄っていきませんかという恭也　なのはの兄だ　の言葉を断り、そそくさと帰宅してしまった。

その際、シロウがなのはが外出したことについてのおとがめを無くすためにごまかした。ごまかしたのだが、それがユーノにとって大変遺憾だったことを付け加える。

なのはから連絡を受けたシロウがフェレットの様子を見に病院へ行ったのだが、そのフェレットが脱走したのだ。そして、それを聞いたなのはが、家族に伝えることなく衝動的に飛び出した、となっている。

確かに筋は通っているが、納得いかないとユーノは軽く不貞腐れていた。

（僕、脱走なんかしないもん！）

と、ユーノは頭を軽く降る。思考が逸れてしまった。

そして、なのはの顔を見つめた。

彼女は帰宅してから教材を広げていた。しかし集中出来ずに眉を潜めたり、むーと唸ったりしている。

その、宿題に集中できないでいる姿を見ると思ってしまうのだ。心優しい少女を、これ以上厄介に巻き込ませたくない。

……虫の良い話だ。こちらから一方的に巻き込んだのだから。

「うん。ずっと考えてただけだね。……なんで、シロウさんがあ

んなこと言ったのになって」

だが、なのはどこかずれた返答をした。

先ほどもユーノは思ったのだが、シロウがなのはが魔法に関わらないように言うのはそこまでイメージと反していない。

多人数では効率が悪いなどと真顔で言い、一人でジュエルシールド集めを行いそうな感じた。

事実、その考えを裏付けるように彼は馴れ合いを好まなかった。

ユーノが彼のシロウという名を聞くまで、そこそこの時間がかかったのだ。

そしてユーノは、シロウが手伝いをしてくれたジュエルシールド発掘作業を思い出す。思い出すというまで時間は経ってないが、密度の濃い時間のお陰でそう感じていた。

その一旦を担つたのはを見、そして誤解を解こうとした。

しかし、それより早くなのはが言葉を続けた。

「あ、ユーノくん。でもね、私はぜったいに手をひかないよ」

「……え？」

何が起こってるのかはまだ良く分からないけど。

なのははそう呟くと、ユーノを見た。

「誰かが怪我をするのは嫌。それを助ける力が有るなら、見過ごせない」

そこまで一息でなのはは喋ると、目を閉じて息を吸った。

「にやはは。だから、そういうことは言わないで欲しいな」

「そっか、うん、ごめん。これから、改めて宜しく願います」

シロウさんにちゃんと説明しよう。そして、一緒にジュエルシールドを集めたい。

ユーノが、そう思った瞬間だった。

唐突に、悪寒のような感覚が全身を走る。慣れ親しんだ感覚。

しかし、今は悪い方向にしか考えが行かない。

「なのはっ、結界が張られた。魔法が使われた！」

外灯の光が、夜の暗さになれた目に鋭く刺さり鈍痛が走る。

他人よりも視力が格段に良いのも考えものだ、とシロウは考えた。

……今日は殊更冷える。春も半ば、これから夏に差し掛かろうというの日、この寒さは冬に戻ったみたいだ。いくら英霊といっても、受肉した今人の身で有るにはかわりない。寒いものは寒い。

本当に、ただの人だ。魔術も使えないー

羽織っていたジャケットの前を閉める。そして、暗い気分がそのまま息となつて出た。

「ク、お互い大変だな使い魔。この寒い日に」

ため息が漏れた口を閉じることなく、そこからは新たに言葉が発せられた。

……不信に思った切っ掛けは、なのはとユーノを家へと送っている最中のことだった。じやり、じやりという、小さな砂利を踏みしめる音が背後から響いていた。

尾行だ。

だが、シロウにとってはあまりにお粗末なそれだった。

足音を立てているようじゃ三流以下だ。

前にいた世界は語るに及ばず、この世界に来ても散々管理局らに使い魔や遠見などによって探され続けたのだ。

いくら魔術が使えなくても、気が付かない筈が無い。

「気が、ついていたのかい。」

はん、相変わらず破格だよ、お前は。魔力を封じられてそれなんだからね。

それで、今のアンタは少女の保護者かい？」

その言葉に、人知れずシロウは安堵の息を漏らす。

もし、彼女がなのはのジュエルシード封印の瞬間を見ていたのなら、後ろにいる女とその主は間違いなくなのはを襲い、戦闘に発展していたらと思うたのだ。

だから、先程なのはに釘を刺したのだ。

今後ろにいる彼女は甘い。

戦う意識が無いと分かれば、見知らぬ女子供と命懸けの戦いにまで発展はならないだろうと思ったのだ。

それが取り越し苦労であることが分かり、それ故の安堵の息だ。

しかし、魔法に関係しているのがバレてしまったのは確実だ。保護者、というのはそれを例えたのだろう。

それでも大丈夫だとシロウは思う。彼女たちの第一目的は、あくまでも宝石集めだ。なのはから手出しをしなければ戦闘に発展はしない筈だ。

……しかしまるでシロウを待つように高町家の前まで尾行をし、声をかけられて素直に姿を表したのは、つまりそういうことなのだろう。

くつ、と喉を一回震わせると、シロウは後ろを向いた。

「たわけたことを言う。知っているのだろうか？

私は……”正義の味方”だ」

## 第一話（後書き）

読んで下さりありがとうございます。

三本目の連載とか、執筆速度が鈍亀な俺にとっちゃ自殺行為ですw  
どうしようやっちまったwww

マジで更新は遅いです。たまにふらつと訪れて頂ければありがたいです。

## 第二話（前書き）

\* 最初の内はシロウさん戦力外です。

## 第二話

そこに、アルフが居た。

金髪の娘の使い魔で、アルフと呼ばれている。今は人形だが戦闘時には巨大な肉食の獣の姿形になり、手に生えた爪から重くて鋭い強烈な攻撃を放つ。というのがシロウの知っている全てだ。

「……それは、私たちと敵対するってことでいいんだね」

ギロリ、と擬音がついてもおかしくない位、視線に怒りを乗せて睨むアルフ。そんな彼女に、シロウは苦笑を持って答える。

「そうでもない。事情がわからないのに敵対する程馬鹿ではないさ」

「なっ！ あの時散々攻撃してくれたじゃないか！」

「……馬鹿か？ いきなり襲われて、無抵抗なやつがどこにいますというのだ」

「そっそれはそうだけど……。もう、後にはひけないんだよっ！ 決意してここまで来たんだ。」

正義の味方。アンタは、絶対に私たちの邪魔をする。悪いけど、今の内に 殺させてもらうよ！」

空気が変わる。揶揄でもなんでもなく、アルフが結界をつくり、文字通り変わったのだ。

戦闘の兆しを感じとり、シロウは口角をニヤリとつり上げる。そして、両手を肩まで上げると脇を締めた。戦闘体制だ。

「徒手空拳は苦手なのだな。このさい文句を言ってもしょうがないか」

アルフが魔力光を放ち、獣へとその姿を変える。

立派な鬣、鈍い光を反射する牙、人の姿を優に越える巨体、足なんかはち切れんばかりの筋肉が見てとれる。そして自然種にはあり得ない、獰猛さが現れたと錯覚すらしてしまう毒々しい橙色。

その姿は、一撃で人を容易く葬り去る死神そのものだった。

目の端に過るのはあの記憶。座について消え去る筈の記憶が、

最愛の人によって救われたそれ。

頭がチリチリと痛む。なにかに急かされるような感覚だ。

それは目の前に迫った獣の爪か。今も目の中で鮮やかに蘇る、元居た世界で見た虹色に輝くその軌跡か。

否。それは打ち合いだった。

己自身の、理想と現実をぶつけ合った戦い。  
バックステップを踏む。

体が重い。強化も出来ないただの人の身は、こんなにも不便なのか。皮一枚で交わした爪が空気を裂き、体を撫でた。

戦いの最中に相応しくない、思い出し笑いが込み上がる。

（そうだ。私は、正義の味方なのだ）

「チィ、かわすな！」

「無茶を言う。私に死ねと言ってるのか？」

「最初から、そう、言ってるだろうが！」

どこかふざけた会話をしながら、アルフは噛みつきこうとする。

獣の強靱な肢体から生まれる攻撃は、とても強烈だ。一瞬でシロウに肉薄して、その体をミンチにしようとする。

しかし、シロウも黙って殺られる筈も無い。体を右に傾け、その勢いを持って攻撃を避けようとする。

が、交わしきれずに歯が足をかする。それと同時に、シロウが振るった右手がアルフの頬に当たる。

痛み分けた。

アルフの歯がかすった足から血が流れ続けてる分、シロウの方がダメージを受けているが。

「やっぱアンタは強い。だから、私は全力でアーチャーを……殺すッ！」

と言うと、アルフは人形に戻った。

そして右手を虚空へとつき出す。その手の周りにバチリと電気が走る。それを見たシロウは、直感的にろくなものじゃないと感じ、アルフに突っ込んで発動を止めようとした。

が。

「遅い！」

フォトンランサー・マルチショット。

シロウよりも早くアルフが放ったのは、この魔法だった。

ナイフのような形に圧縮された雷が、数本発射される。アルフは肉弾戦を得意として、この魔法は主であるフェイトに比べると格段に劣る。

だが、攪乱目的で放たれた魔法はこの上ない効果を発揮した。

地面にぶつかった一本が、ばちりと弾けとんだ。シロウは内心毒づきながら、フォトンランサーを避けようとする。

アルフには、この隙で十分だった。

「チェインバインドッ！」

アルフが伸ばした手の回りに、魔方陣が浮かび上がる。

そこから半透明の鎖が出て、たたらを踏むシロウを捕まえようとする。

と、強烈な魔力が迸った。はたしてそれは、淡い桜色だった。結界の外から放たれた「砲丸魔法」は、容易く内部へと貫通した。非現実と現実が混ざりあい、パキン、と軽い音を経てながら結界は崩れ去る。

異質な空気は全て空中に溶け、街灯に照らされてどこか寒々しい、夜の空気が闊歩する路地へと戻った。

そこには、地面にへたれ込んだ女の子が一人と、小さなフェレットがいた。

「ふ、ふええ……」

小さな魔法使いは、自分が起こしたことがどんなに凄いのかを分からずに、過度な魔力の酷使に目を回していた。

「強く願うんだ！ レイジングハートを握って、心の底から、強く

！

「うっうん」

なのは少しもりながら、小さな両手で杖を確りと握っていた。場所は家の前だ。

ユーノが魔法の使用を感知して、なのはの部屋の窓から二人は飛び出した。

……最初から近いうちに襲われると分かっていた。あんなにもしつこく、ジュエルシードを求めて襲ってきた少女たちが異世界に遭難したくらいでは諦めないだろうと考えていたのだ。

その考えは合っていた。襲われたのは偶々今日で、ユーノではなくシロウだっただけの話。

そして、この事件の背後にはかの大魔女プレシア・テストロッサが関わっている。

襲われても彼の実力なら大丈夫だと思うが、シロウという大きな障害に対して大魔女ならなんらかの手を打ってくるだろう。

力を封じたり、とか。

（まあ、さすがにそれはないだろうけど）あまりにも突拍子もない発想に、ユーノは苦笑してその考えを否定する。

しかし、今結界を貼られてシロウが出てこないのは事実だ。何かが起こってるのは確実。

心配しても、し過ぎるなんてことはないのだ。

ユーノは小動物にしては豊かな表情で不安げな色を瞳に浮かべると、横にいるツインテールの少女の横顔を見つめる。

膨大な魔力を保持し、初めて魔法に触れたのにジュエルシードを封印するという偉業を達成した。

額に汗を滲ませながら杖を握る姿に、ユーノは正直に言う듯期待していたのだ。

彼女なら、なのはなら大丈夫だ、と。

魔法の力はあるの力。真摯に願えば願うほど力は上がる。

ならば。初対面であるユーノ自身を助けるのに躊躇が無かった心

優しい少女は、シロウを助けることが出来るのではないか。  
そう、結界をぶち抜くほどの魔力を放てるのではないか。

（頑張れ、なのは！）

応援しかできない自分に不甲斐なさを抱きつつ、なのはを見つめる。

「えっとレイジングハートさん。」

お願い、シロウさんを助けるの、手伝ってっ！」

<All right, my Master. Shooting  
Mode>

え、ほ、本当に？

予想にしてなかった程沢山の魔力がなのはから溢れでて、ユーノは驚きを隠しきれずに口から言葉が漏れる。

「大丈夫だよな。レイジングハート、いくよっ！」

と言うと、なのはは杖を振りかざした。

先端に膨大な魔力が集まる。小学生が集められるものじゃけっして無い量。

ましてや、今日初めて魔法と出会ったなんて誰が信じられるだろうか。

そして、綺麗な桜色をした魔力は限界まで集められて解き放たれた。

ユーノは、なのはという少女の恐ろしいくらいの才能に今日一番驚く。

ディバインバスター。

なのはが使った魔法だ。

### 第三話

「チィ、新手かッ！」

アルフは、その鋭い犬歯を見せながら憎々しげに呻く。

「なのはにユーノか。……助かった」

対してシロウは、表情をあまり変えずに言った。  
しかし、その足からは血が流れている。

「シ、シロウさん！ 大丈夫なのっ？」

なのはは小さく悲鳴を漏らすと、血相を変えて、ぱたぱたと足音を立てながらシロウへと走り寄る。

（シロウさんが、怪我を……？）

彼の、管理局から目をつけられるほどの实力は偽りではない。

ユーノは疑問に思う。確かにアルフは強い。強いが、シロウにそう易々と怪我を負わせれるだろうか。

ユーノは、アルフをじいと思つめた。

アルフも謎のフェレットを不思議に思つたのかユーノのことを見て、二人の視線が合う。

「……ん？ このちっこいのはもしかしてユーノかい？ ああ、あの魔女の魔法を食らったからかい」

ユーノはその瞬間を思い出して苦渋を飲んだ顔をする。

二人の襲撃者と戦闘を繰り返しながらも、ジュエルシード 願いの良し悪しにかかわらず、真摯な願いに触れるとそれを実現しようとする宝石だ を発掘し、管理局まで郵送しようとした時のことだ。

空から、雷が降ってきた。

カラリと、湿気のしの文字すらない空から強大な魔力を内包したそれは、どうやらプレシアによるものだったらしい。

……ま、最初からそうだろうと検討はついていたのだが。

そして、そのさいにどこか逃げようとしたらココ、鳴海市へと飛ばされたのだ。

そこにシロウがいたのは不幸中の幸いというべきか。

「本音を言つとさ、それについては同情するよ」

アタシは絶対嫌だ。そう言いながら、両腕で体を抱くアルフ。その動作に、どことなく侮蔑を感じてユーノは苦虫を噛み潰したような表情を浮かべる。

「う、うるさいやい！ お前なんかアーチャーさんにこてんぱんにやられればいいんだ！」

魔力体力ともに疲弊しきつた今、ユーノ自身が倒してやると言い切れないのが、かなり悔しくて情けない。

「ほおう、知らないのかい？」

今のアーチャーは、弱い」

錬鉄の英雄と砲丸少女、第三話始まりますっ！

「ユーノ。……それは、本当だ」

ユーノが何か言うよりも早く、シロウが口を開いた。その声色は隠しきれない苦渋が溢れでており、事実を雄弁に語っていた。

何かなんだか分からない。

と、図ったわけでもないのになのはとユーノは同時に思った。

なのはは、ほんの少し前に日常から非日常へと飛び込み、魔法という異常に関わった。

それだけでなく、親の友達であるシロウが魔法使いで、偶然知り合ったフェレットのユーノと知り合いだった。

さらには、血が流れるような戦闘が行われて怪我を負っていたのだ。

でも実際は強くて、でもでも弱くなつてて？

（にや、にや……）

なのはの頭は、パンクしかかっていた。

先ほどまでならば、そんななのはのフォローにまわっていただろうユーノも混乱している。

（あーもー、なんなんだよこの状況ッ！ シロウさんはいきなり消えるし、プレシア・テストロッサに襲われるし、シロウさん弱くなってるらしいし！）

怒涛の「し」三連続だった。

「その女の子！ 邪魔するなら、ガブリといくよ！」

しかし、アルフは考える時間を許さない。

邪魔するなとなのはに凄んだあと、ふ、と腹から短く息を吐いた。そして、シロウとの距離をつめようとした。

「だ、だめなのっ！」

しかし、両手を広げたなのはが止めようとする。  
その背中を、シロウはびっくりした表情で見ていた。

……裏切りには慣れていた。

助ける為に向けた背中。しかし、それに斬りかかれるなんてのは日常茶飯事で。

だから、こそ。

躊躇もなくシロウの前へと飛び出し、向けられた小さな女の子の背中を、どこか眩しそうにシロウは見た。

アルフは、そんな彼らを一瞥すると何も言わずに走る。

前髪が顔に掛かり、その表情をうかがい知る事は出来ない。ただ、口元は憎々し気に歪んでいた。

「戦いはダメっ！ 私は何が起こってるか分からないけど。……あの、話し合いつて出来ないの？」

「うるさい小娘だね！ こっちには時間が無いんだっ！」

何がアルフの琴線に触れたかは分からないが。なのはに叫ぶと、走る勢いを強くする。

間に合わない、とシロウは思う。

アルフのスピードは早く、今からなのはが回避をするのは厳しく思えたのだ。

なら。

シロウはその筋肉逞しい腕でなのはを抱くと、地を蹴って下がる。勿論アルフも追従し、爪を振るう。

しかしシロウの放った蹴りによって、その手を止めなくてはいけなかった

「ふ、ふえええ……」

瞬間の出来事に、なのはは目を回しながら息を吐いた。  
そんな姿にシロウは眉尻を少し下げながら、口を開く。

「なのは。昔から思っていたが、君は無茶をし過ぎる。

……もう少し自身を顧みてくれ。」

「あ、ありがとうシロウさん」

話ながら、シロウは抱えていたなのはを離す。当然、視線はアルフから離さずに、動きがあつたら即座に対応出来るようにしている。  
と。なのはは、そこから動かずに。

「シロウさん、あのっ！」

口を開いた。

時間がない。

アルフは、この一心に突き動かされていた。

……アルフと主は、少し前に別の世界から転移魔法によって鳴海市へと訪れた。

その際時、アルフは主である少女が転移を行う際に、わざと転移魔法を手伝わなかった。

それは疲れた主が変わって鳴海市を見回り、そして     アーチャ  
ーを殺すためだった。

ギリ、と奥歯が音をたてる。気が付かないうちに奥歯を噛み締め  
ていたらしい。

アーチャ という存在の厄介さは、そういったことに疎いアルフですら知っていた。

強大な力を持っていて、敵と定めたものは必ず殺す悪魔のような存在。

……ほんの少し前のこと。世間を賑わせていた次元犯罪集団であるウラドを壊滅させたのは彼らしい。管理局が追い詰めるより早く、だ。

管理局よりもたった一人の人間が優っていたのだ。これは、明らかに異常な事で。プレシアが彼のことを 研究以外のことを調べいたのは記憶に新しい。

だから、‘それ’ が彼女たちの前に現れた時は悪夢としか思えなかった。

彼の力を封じること成功した時、魔女下されたアーチャーを殺せという命令はアルフにとって不本意だが共感したのだ。

こいつは、絶対自分たちの邪魔をする。だったら、弱ってるうちにケリをつけなければ。そう、アーチャ が魔力を封じられただけで自分たちを諦めるとは思えなかったのだ。

だが、その時殺さなかったことに後悔はしていない。

フェイトに殺人を行って欲しくはなかった。

おかしい話だが、こうしてアーチャーと対峙していることにどこか安堵している面も合つて。でも、だから今こうして強大な敵に対して一人で立ち向かわなければいけないくて。

プラスとマイナスに支配された、複雑な心境に内心で溜め息を吐く。

「戦いはダメっ！ 私は何が起こってるか分からないけど。……あの、話し合いつて出来ないの？」

「うるさい小娘だね！ こっちには時間が無いんだっ！」

吠える。

（ツライよ、まったく……）

弱っているとはいえ、ただでさえ厄介な相手に見た目とは裏腹に優秀な少女。

可愛らしい外見に騙されることなかれ。内包する巨大な魔力、それを駆使して結界を破壊する程度の制御力を持ち合わせているのだ。正直、やってらんねえ。

（ま、フェイトの強いけどさ！）

とはいえ、一人で戦うには少しばかり……かなり、厳しいものがあるだろう。

だけど負けられない。ここで、二人とも倒す。

決意したのだ。

先ほどの転移魔法の折、手伝わなかった時、大切な主にこれ以上負担はかけさせまいと。

この二人は確実に邪魔になる。

だったら、ここで刺し違えても二人を止める！

少女を抱いて下がるアーチャーに食らいつくように攻撃を放とうとするが、それは彼の蹴りによって止められてしまう。

はやる気持ちを抑えながら、別の手を打とうとする。しかし、それよりも早く少女が口を開いた。

「シロウさん、あのっ！

私も、お手伝いします。……魔法使えるし、足手まといにはなりません！」

「はっ？」

……珍しいものを見た。

何があっても冷静沈着なアーチャーが、目を見開き口をあけて驚いている。魔力を封じられた際にも顔色一つ変えなかったのに（実際は、ポーカーフェイスを必死にしていたのだが、アルフは知らない）どうやら人間らしいところもあったらしい。

と、内心で愚行していた自分を律する。アーチャ　が呆けている  
今、チャンスなのだ。

魔法の一発や二発でもくれてやろうと自身の内にあるそれを練り  
上げようと、した。

その瞬間だった。

アルフにとつて、もっとも大切で　だからこそ、今聞きたくな  
かった声が響いた。

「　アルフっ！　」

最初からわかっていた。わかっていたのだ。

プレシアに忠実な主のことだ。ほんの少し体を休めたら、ジュエ  
ルシードを搜索するために町へ出ることは。なのに、この状況。

歪ませた顔に何を思ったのか、血相を変えて走ってくる主に申し  
訳なさから顔を反らす。

「……ごめんよ、フェイト」

「うっん、大丈夫？　怪我はあるの、アルフ」

フェイト・テストロッサがこの場に現れた。

### 第三話（後書き）

難産でした。

イヤほんとマジで、己の文章力のなさに絶望しながらこの話打ってましたよ。

設定を詰め込みすぎたorz

最初の内から設定小出しにするんだった。てか、出だしを変えるべきだったとうつつry

今話、ひどくてごめんなさい。

今の俺じゃこれ以上かけねえっす

余力があるときに改訂します

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0080j/>

---

砲丸少女と錬鉄の英雄

2010年10月10日02時36分発行